英乃一雫 夢字橋

12
881
61

宮城県図書館蔵

夢浮橋　宇治十帖第十

巻の名は寺　夢の浮橋と号するもたゞ事とは
思ひ不審あり　其故は代々物語相違なきを考
るに或巻々詞の字よりとり或は人のよみそへ
て名とせり　如斯夢浮橋とは
当代迄無之　夢浮橋とは
あるよりこゝあり　若中ニ夢のうきはしの
ごとやまぼろしの　世中ハ夢のうきはしの
うらわかうきはしをとこそ思へ　不絶代々巻の名を
とるよし　但少あやまりあり　て来りしもの也　又都より
うりつゝ宇治に行くハ是の後こゝにて
也　扨又宮の巻ひるがへるにんをあや

宮城県図書館蔵

まいせんうるれまうしたまへ
ともそをまもうるのたして又小野を尼云ようせう
まうくをえうの山の禁りを任りさされを一生れ間
さるのうう事乃をてうたるものうを絶よひとう事
うを絶とも猶世に出うう出くれ世をよ郭
て蓋乃ものは小野をに任絶よう世を行て言
任絶りを答よ不及して果たるさ海をとうへは
怪なる事の事をは世をうをもうれくをえうれ絶
たるさ出をれ世を乃名よく相叶ものやものう事
世物語一部の心を事はれを世を全て れ名と
をもをうるものや又世中をとをしめ物語を事乃お
をりを絶又世縁等をたりをお事の続又
小略を次は海舟とうたにつをて伊勢諸る伊勢

冊ノミコトアラノ中ノ天海橋乃下ふく芸為夫婦しをく陰陽
をとうふ洲国ををせりまの姫也是皆
男女乃ふうひの根源也さまを代世んを考乃名
りをもをてうるをうを有年に代世をは
碧世をれ蓋り明るをあり南流不用を梅代
世を対は蓋廿七策やを碧奉れ来はを也世をを
蓋の世とを乃をうを任夏りをを海とを乃へ
世物終世を名相違ををとを碧をを或は須乃
をを乃て名付或は事の代世をとをを乃て号せり志
るに代世をを事乃海橋と部をる事須をを見
を代事のをを乃を古来乃石審也九事れ海橋
とを須是ををとををまるを事のををれ海橋
とあるを事りをを乃或院云を碧蓋の

又と見るまでもなくあるにまかせてみる
乃あるゆへなきことをいふ仏性に長と云
洞又ケ沢よりの又造乃長行物をもあるみる
ふぐふうれとあるもまたとみたる教義也完める
らぬ四りまをて長といふる也仏像法蔵也
彼又と云ふるむ見くあ〜ふ乃ふるみく紙の
者あと例のよりあるまて去たるとふ去
仏物語乃あるふんさ〜ふ色うあもう言よりぐる
にあ〜ふ〜ふ〜云常一迅速の理とあ〜盥者必
裏乃語をふ〜しめんふ多めやとれ部月と案
ふふにふん長といふふ〜ふ〜むるふ〜ふんや者云乃法
法いふまを長りあふ〜ふもてふ〜ふふる
涅槃経あへ生死云常行如姫長と祝大国覚

法ふ仏始終生本来成仏生死涅槃行如姫長
善男子如邪長故當云生死及與涅槃云云記云
滅云ふ云ふ云文唯識論あも来得真覚常雲
長中故仏説為生死也とあり内外乃法ふる
仏長ふ付く法〜の像あふと 香山居士洞ふ言下
忌言一時畢長中説長両重虚と者也ふ〜や
次浮橋といふ伊特諸伊特冊ふる天乃浮橋ト
あ〜て去る夫婦〜法〜陰陽と定め洲国と
生物〜ふ乃ふの始也完法男女れ〜ふ〜ひふりお
ふ〜ふ〜彼浮乃用と移俗とりふ〜ふ〜と三
百篇の中に関雎麟趾乃起ふと鵲巣騶虞れ徳ふ
ふ〜ふまて仏夫婦の乃ふとふて国乃用とのべふ
ア陰陽一乃あふと生ふる郷也待の序に関雎后妃

之徳也風化也所以風化天下而正夫婦焉故用之郷
人焉用之邦国焉と云りされバ浮橋ハ生死乃わ
たりを煩悩の根元也夢とハ世間出世之法皆如幻如夢
也といふも也無相乃理也煩悩即菩提生死即涅槃
乃儀此名あらハれたり仏説已説乃不可説にして
なる所也ほ法華経の説相皆序正流通乃三段わ
有流通ふ題名ともあらハれ常途の儀也と此段
を持つ乃もとを夢のうきはしと号を別して八一巻
乃名也しかハ一部の構なるべしそとも光源
氏物語といふごとく或夢浮橋物語とも五十四帖の作に
ともいふべきを光源ハ物語と光源氏とあつまりて
乃教也とも五十四帖ありてむしろも心城の五十四品乃ゆえを
とらへ夢の浮橋や此もを名附説出世之又以為菓加

潤色耳但再三案之夫夢乃儀ハ夢此一字の外
すれの心あるし浮橋ハ夢まひらまくし出来洞也凡
当流乃義ハ法華やをもとを本として此説をなる権也
乃本意も世に夢ハ世中ハ夢乃ゆゑなる此浮橋ゆう
ちかりて物をとりとふを以ては浮橋ま在乃
方あるし定家乃其の本意此夢のかよひしと続し
ての事もも同じ也末経後者乃本意を推ちるに
此物語ハ始よりいかにもくに寓記荘子寓言有一同
でりと而彼荘周ハ胡蝶夢ま死生乃変ともそらえ
物化乃理也且有大覚而後知其大夢ともと深義の寓
言とて百年此夢ま化し和雨某寓言とも一部乃義
よまもんすめり　花厳経まハ知一切法與夢心皆悉
悉夢ハとも説り古人の生死涅槃如昨夢天堂地獄遣遣

自在文 荘子斉物論云方其夢也不知其夢也夢
之中又占其夢寛覚而後知其夢也且有大覚而後
知此其大夢也而愚者自以為覚竊竊然知之君乎
牧乎固哉丘也与女皆夢也予謂女夢亦夢也是其
言也其名為吊詭万世之後而一遇大聖知其解者
是旦暮遇之也 昔者荘周夢為胡蝶栩栩然
胡蝶也自喻適志与不知周也俄然覚則蘧蘧然周也
不知周之夢為胡蝶与胡蝶之夢為周与周与胡蝶則
必有分矣此之謂物化 此章ハ夢のみを胡蝶見
えさせるも一部の名目ハ四篇より抜萃して院ヨ尺
しゆきるとぬうれもうしハ古書乃胡り世中ハ夢のも
らとの深旨をよめる歌ゑて夢のうちをよそとて
夢たりもるを細河海抜りいつる桐遠をく気仙り

[illegible]の絵の細めをうちん夢れうちめをわ
うもをもをうちをうんとうやをうんと深舟乃まま
をもをのうひ絵をのるのにうををりしをもをしハ芸世
四もの芸ようと夏をとれまりんくたりうを 細芸世
七家くの絵ををれをもをハ文月をんまをてのる者
此巻ハそ乃来の夏やをををるの河海りうりをを
乃西夢れまを絵文をとひをりありて八一をを乃名
ゆ一をハ一アの名たりるへしとをを此世にををくハ
の絵夢乃一生ををあるをゆめのをを或ハ陸奥よ
をうををを陸をりをを部よのりりてをををを
うをををはりひ宇治みをををを後をくあをひめを
あをををりをなひふををにををくまりてをりをを
夢乃ありよありをををるのりを又一部れ名めて

とみまさに相愛きまする源氏元れ一生乃事幻者
まさにおさまると薫大将の一生を世をうのゆさま
ゆうり盤古必裏乃景幻と古とうけつつて凡
せ仏ゆも景の浸橋とはゆもうう羽ゆ紀と経号
よくくるゆ古来石審あり今案ゆ物語おひとくよ
荘子乃第法りまれりまる所ようれ逍遙篇を
逍遙とまるうと宗くゆ遊乃字ハちゆ又ゆの歌物
論を物とのこゆひくゆ歌の字ハあゆいゆ遊を心
とまるて名つをたるゆ仏景の浸橋をゆめといえ
んとめゆ景ハまれるに凡ぬさうハめを行うる居
ゆり又橋をゆるゆるゆ景のうへゆを居とゆるん
宗をまるて名付ゆるにやまを心甚源なる者を
仏世ハ元ふ歌物論とまるて出るゆや歌物論

乃始めを南郭子綦隱几仮如橋木といつとよ
つを出るゆて胡蝶の景れるゆく出とめたりゆ物論
ハゆ物者乃まりをゆ
をまるくくやまるんと出るく世をゆく者れ事
をひ出れとゆくふゆゆゆをまるくあやしう
ゆも者乃景ゆうとのを心をえゆちんと出る胡
蝶乃夢り周とまれゆ
玄妙乃ゆるゆ 幸於同之
ゆゆをゆてまハせをゆを行やうに経仏ゆとうやう野
を行ゆ 蕙毎月八日に仏教ゆの中堂り来経
て経仏修養ゆ行ゆゆやをれを仏とハゆるゆ
修学に毛乃をり 細 蕙中堂へ来り行つり小聖
りゆをゆ行ハを心をゆ乃ゆ連ゆあるゆ乃

えらぶと
又乃日八横川すりあらうこまり
ものとなり　墓下四りうも碧乃つるもと為なりんとて
次の日八俵部乃坊りわらもと為也
年比乃清四のつとめとはきをうくひ為日々れとと
にいとむつましくおもとにあり弟の法仏たひ一品の宮
乃清四ちの行りさまをくひ行つるにをくれ為つるそん物
し行ひそうせんなひ為ひくをよりもきもうをうとひ為
つくい面すこし弟の紀琴うをそん行てくれて
墓のんも年来行縁をとのるようをつきて八俵部
とうをひ行へとをさのをひつましあるのハたり
つましとと度女一宮物為りの庭をあとかり物
し為へとも験をの紀ととして恵心俵部を乗り行て内

行縁し為つるよ和をとさ物為をりて墓を
たうとくあ為して一八信じ為とう俵也　為と云
よりとものを地也
ものをくしう行をを為ものくわををものしあるう
とくもてさをもをものく為ゆ物結をとをやうふ
しあををすをハ清ゆつをちと乗り為ゆすをしん
くをのまりぬるに　細　俵部れん也　案墓のまも也
とのををうをに為り為つるやとりやをん俵ととひ行へ
も　墓の物也
をう為り　細　俵部乃色答
いとををやうをなる沢りるんなふうをくあ為をち
あを為りをを　細　よの俵ひをるしをんををしをを
案　者乃人をと俵面ををハをを紀とを俵也

京にまかりくしさすまうもいかゝぬうちにかゝあまこも
をいかるかひるさを　信濃乃国也京より可然信
都の信濃しなのゝ国にまかりぬるを毎月紙い
うしなきんとおもひ行るに雨もふるまと行
つゝみ聖いちりに死なるにたりこゝにとゞまる也
弄　さゝぐしをすまうもとすゝみ山にちりゝすまを
んとのゝ国也
秋中あるつまをもひひろみこんとおもひ行へとゝまて
行るをとゝ中絶ゝ　をく毎をゝゝ絶をあとの心也
そのやうなる也　細　葛の国夕雲乃面絶ゝ内見
雨の信絶しまゝうるわも也
さゝくちりをゝろひまて人ぬうう信絶るを
弄　夕雲のうをひ絶ゝみ聖をとゝ絶をこゝんを

ゝをく行ゝあや
ひをゝをいとうをうみをりゆくゝ山をあとの行ひをく今も
うちをうをうををく　葛のさ海也信都のうゝんも
思ひやうにいとうををうをゝ内ちをし行り　葛の国也
うをく春るも也
又雨ゝ雪をくんうはをて雪ゝうをう雨絶をとゝにうを
心絶をを絶ゝさををゝ人をゝうをゝをゝをゝれ行をとを
葛の国也詩まを信都ゝ絶をゝ心をゝををを
信都乃ゝ絶ゝくんをゝ也
ゝ乃山里ゝをゝをゝ人をゝのゝく行人ゝあ行やゝを雪行ゝを
葛の国也ゝ絶ゝをゝ
あゝゝゝくゝゝそゝゝゝゝゝゝゝれ行をゝ
雪ゝゝゝゝをゝを思ひ絶ゝゝをゝ　葛乃国也を絶ゝ

そとそてんをとりつけられたるの後や
待てゝにかくいつもるものとさうを行てそうやを受給る
ものとの　墓の河やの稲荷乃事なる歌給
て出家の給ことをとうり
まさゝもわくゆやあるゝもあるゝ人なまさもまく
にうるひあるやうにうゝと所人なん給る紙あと
の給　墓のもとをとハ先たるやうう毎るとゝろ
とれんやのことうゝ給やうゝうりまゝとうり
信部されそよそてんをとりし人のさ後そうし
信部のんやもあるる
所くまての給つうゝうゝしるハ世されたりあるん
りてそあれとをふ法師とをゝうゝ給をもるた
ちまゝ給りうゝちゝを所りゝ者ゝとゝもひ給まて

いつへさゝしんやうゝひまそ所りゝ給つに
ゝそはあれうゝうゝと所ゝ給ひゝ易給ゝんりう
うれあるへさゝとゝ給ゝ中ゝあゝうひうゝむ
にあひあるへしあをゝそうゝをひうて　業じを
まゝたる信部のんやうゝまてハ給信部乃心や
いるを給ゝとゝ給ん
信部乃河
こう月給ゝちゝくまあやゝゝ思ゝ給ゝるんの給るゝや
ゝをてうゝゝこに給る尼ゝゝの河部ゝゝりん給ゝてまう
てゝ給ゝるゝみちゝゝ給乃院と給ゝるゝゝまゝゝて給を
ゝに　信部ゝやうゝゝひゝく業ゝゝゝゝゝゝゝゝの
ゝに給ゝる乃ゝゝとゝゝゝ出給や
ゝゝ乃ゝゝを給ゝり給ゝゝていゝゝゝんをゝゝゝゝ

つきにんのもうてきこうん　信濃の海老
氣紙りあらうあるかやも　河　光氣　光高や　細　不考
の義まうるへ
やうるとしひたりしに　信濃宇治へまうと祈るや
まりのやしまとちんとさくめうて
河　私語　良文集　耳言　百葉
歌のまうふうるしまうさとまてあつうひるけさ
てうんはし　信濃部はしとも
てもとはつうひしとも
はんもうくもうはるうはうさうはうみはるさ
うひうくはしうれて　細　うさ舟うるや
ひうはは絵うあるとものようさたううん人のううひ
とうひうてあるやうるまみやとみつしうはうて

河海抄　絵　宣　相面せはるうう　花　みとのも
はうう　之　入　撰　の　人の義　生　まうさ　海　よ　おれ　絵
神つはるなる　絵へ　毛　養　うん　魂　とるれ　人と　宣
はとうつへ　物　あるう　と　年　抵　云　員　業　て　人　主　十　六
代　意　神　天　皇　れはる　に　絵　波　う　宇　治　の　う　よ　て
まうくさ　天　皇　崩　沸　し　絵　附　れ　宇　治　の　う　よ　に
御　位　と　はつう　絵　る　よ　の　絵　波　つ　う　る　と　は　て　動　て
はう　つう　絵　や　う　さ　う　の　絵　く　絵　波　つ　う　る　よ
る　う　と　はる　く　る　よ　は　見　れ　う　よ　は　院　は　つ　絵　を　ゆ
はう　絵　上　は　宇　治　う　う　る　う　や　に　あ　う　そ　ひ　う　ん　よ
う　は　る　ひ　た　に　る　う　う　る　う　や　と　彩　し　絵　ん　さ
う　や　る　う　ん　院　は　ひ　う　く　ゆ　絵　ゆ　市　れ　絵　絵　る
撰　よ　は　さ　ゆ　る　う　撰　の　牛　う　う　の　絵　は　ゆ　は　天

今はよりとも世をわりしとハ兄はなる清信なりつる程
をれしうしや時の奇
難波津はさくやこの花をこもり冬ハ春と云くやこの花
やとよめる世をいとり花の御ゆりて地の花しるしを開
榕の中をとうこうつりて宮治すて居ゐうあひくこうこうあり稚稱く
おはしれて玉座のいとまもなくとうんの子とひとを云
丹代公義可能元と云り 源義の清信なりは
さきをく仁徳天皇とやまをうん主十七代めを意神
天皇の御四りをや清 詞大鶏鶏とやまをうは生信
八十七年摂津国難波宮はまつりまつりは年
百十年まつりて崩はやをうものやうのやうとハ
燈ゐ民のうまとをそうひをうりとは信の時

あそりはるを世魂屋はあるとを
淀溪書呂大后の山陵とをりて赤屋の宮のあり
しはるまとと河海の流物をひをりをもいこと
あるこの流や玉座をうまをうんの子とひと
りはたをへをへの死せる代院入榕して火屋をと
りとをはるがををりてをうをとあるをと
のあるへをやそれと四をうけもとめをへをやを
なをへとをりしんやをとをくをやをく
花をるうち雅子れ榕をうをやてう為にやるを宇
治のをれをくを相叶をう
世をををれ中にをんあるを物をををうひををのをを
つをくをうちやをををあとをんしを治をる
法師をををををり

言をりふ

あふりハ神しむへきようひあへぬと　　俳諧ハかり
るゝとあり
毎の猿乃そしらぬやまのひとまなくさそ猿をて念仏
まとふ月へしまをもせきんと給ひとねんしまつふかね
ゐしきとに　　河　一心不乱　阿弥陀経
そのへの前猿くりしかことも月ゆくをてあん佛しことの
ふとしまの思ふふゆくるに　　　右猿れさまのと俳諧
宇治あらハ月ゆくとことと慈みえ月へさをもしし
とや猿や
てんくそら雨あとやうれ猿のあきむまさしそなりそ
すさ芽のにやとあん名ゆえりしたもをして
変化の猿乃そのさとハ乃名んやまろうしみえ天子
と天狗といへるよりあんたりあさむくとハ猿のふか

らんやうのんやさてにあきむまふ出てやあ房此人
なりまく付つり　　花　天狗といへハ宮乃本やあ都みそ
天魔鬼の新りあるとして
京より出てまりて猿と三月ゆくるとハまり花人みくあん
猶しつひ分るを
まつり行つる京みとしへる花小ゆきハ京ちりさ花の
梅よいくるかや三月ミつさと可讀なれんや　細三月
ゆくると俳諧乃月付る三月の末乃るや花ミ秋
まつりてと行まうて四月五月六月三十月ハあ花人
のとく秋しるゝや
なふしうつとうと梅大悲乃ゆまみく後しゝ戻よ
おりて浴あん　　尼公ハ其の折ゆと云へる事を俳
都や猿ゆや

ひとゝせまちて御しかるをとうしうすひさくのち月日ハ程ほ
くへて後しうとのあひたしく侍りけるにひしき給
おり程ゆ年れたとくりんゆるくのおくゝちいとう
ゐらしをさうらうるみ刀へて参りて観音の御かう
とゆうひゐてこうへいかうてにさしまゐらしとさらひ
いゝまて　尼公かむもとめとも御程ゆうしうらひの人
なりや
なくしゐらしなゑるやもとゆさされしうん　尼公
ゆうゑまよ僧都のうゑ人小督れおや給とをと文
をり出のかをたる事や
のちふちんおれかゑふにうつゝ程り侍りてこえん
おとはうまうりしにやうくいゑ出ゑく人と如給うり
きれと　さうもとは小形ろるや僧都山よりおうと

御て小督れか給おとを給しと紙墓よりうら給や
給このちうしたり由れ物の月りされまおこうちうゆん
もう　小督れ是乃事是ハ小督のまたいへうたと
なひ法師の是と如く太君をとぬこゝしゝ又小
督おもつきたるよし見ゑたり僧都よいの事ま
て今ハさうろとせんといへるより小督本性よあり
給や
此ありさ物のにうゝたきをとのまてく談乃世をおもりん
おとうおし当ふの給ふすとの御しうんかしらく
小ゝめともや侍へきましにそてハとて　小督れの
給しおとを結給ふや
まことにをけやしめをはり　小督を出家ます
たりけるや

てしに侍りぬるはおほしめしつゝきこえてかへりてうへそら
りさとりも侍らんかたしおなしこのさ國みやもあるを世
くるりみをもし給ひへりしかと宮もありてまいらし
かの人をこよひもみそせこの君ハ人とともそうちて心
月比をとなりて侍りにおんとも給へて
てしかとハてはをえたるへし
侍るこそあまれとはの宮うてかくまてをさひらて給
なりきとあれともかきにおもひへんとおもひまてありしを
薫の心也　おほよそ給しに鍾ゆるとも中にあると
の給へる也　細　薫の心也浮舟也と浩気志給へり
さえりもしに何りにしそりてしかなれはと　薫の心也
侍るハ此君ハ職ニ此世はあるまその心也
ミ文の心ちしるしけ浅まうしかれたはゝともかへすもあるまし

くやしき給ひなる代　花　此君の名をなりまさりて
細　こよひてたしめて言の字あり　弄　おほかた宮なれ
今ハ宮心をも又是れ此ちすらんも君を薫の心也
兵部卿宮のさうしきをなるにかくまてみ給へきこともなと
思ひの程してはきなくまてなし給へと　兵部
侍従とらしむ人と薫の思ひ給ふ心也
はく物思し君の御事を　細　兵部の心也薫の悲傷(ヒシヤウ)也
おやしとある也　栄　君よりも兵部卿の心也薫の君
樋の物思ひのとおほしてもなをふかく見ん知給也
此世のたかある人とおもふしやうにありはかなむをやま
ちなる御心ちしてはたゝほされて　弄　よ物の出家
せしるの也
あはさまりなかくせし君給ひたんを行へきさまなく此世

乃契りや　是より兵部乃羽也桃の氣あるとのおほ
こともさきれすと云る也
ともかくたりるよ家の子なりとそ擁し行事めいりまうり行や
まうりてかくまうてもなき通路ひるんかしとしひ中務へも
兵部羽思ひなるやハ名棄するにとの仰せや手習の巻
たえる家の姫君えあるしつとや
あかすまりんとさるまるとい人きもちなや有らん
蓬の羽手習ハ玉鬘の人と云ろ何や院まとともさして
こと太手紀人と卑下れ羽也　河生玉勅云本倫八十之
子孫　自当紀王之子孫也云々　細　蓬乃色吾
ことなとりとなると　蓬の家るすとの給へり
いさと出のしまとなとも何しるものなれくてこうきそ
あそこ宮御しかと又いひとうくまるておちあやうへさきそと

ハ名なら給へ何かりしとめてつるん何ととも在ちるここうも
しうえあるをあまけるるにや母とさ用くまらうるひお目
くそえしうれ名るすハ名中文御しさるとつるにあるん
蓬の本かん大臣なんハ宿とも手習ハ本するようしの給也
罪この給ひて地をもあれたいとん中をくあるんこつしハ
ともひ給へなりぬる紙　手習の居りなりたるハ可
既との蓬乃羽　細　出家れなすや
母たちぬ人ちるんりかりてくこひるすしむあるとうくあるんや
出さうやはをもちせるすはしかと給まとと　手習の
母乃なる也
月比うくさを給ふろうほへ年をうかや地さえりしるや
御らん　小野との人く此月手習をかくし給へと
母君なとは去るあるてハ居云るとのおとのたりかや

うまやわらんと蓋乃の詞也　孔　言陸の中方親ゝ孔思
わやこれ中のこひあらん　孔
ひ後もしてやうてまこひ見るうへ〳〵とも　蓋乃詞
うまひはたつくこうつ　孔
作ひく　毋元も詞なれるすを中ハ搭思せんこく
為うんとの蓋乃詞也　孔同
ひくいと引んきたるうへとゝはたゝのひろもこん
わり作へ　蓋れたるうへ　孔　伊部とゝ哲に下ゝ結
ゝとの詞也
かゝうと中てあのうみこひもこんこく意作〳〵ひと
人なるに式蓋のやうなる事とるをいまこにうるとにて
せんとうんこひ詞よるとの詞よゝ〳〵なり　蓋の詞也
ゝ詞のうせひ〳〵ハ変れやうられと兵今ひ詞とまに

ゝうわゝせんとゝ也　細　蓋の字二
いゝこひうまゝこひ詞ゝ中ゝとうへゝゝとゝこひゝさま
ゝ中ゝ詞ゝこゝれと　伊部乃ゝ也ゝうゝとうへとゝ
ゝ詞のうゝ也
うゝ詞ゝとうゝとゝうほゝ〳〵ゝにわやゝ〳〵ゝうゝ也
ぬとあると　浮世ゝうゝんの詞ゝ中れゝをあゝとわゝう
ゝひとの伊部乃ゝ也
ゝて女の清ゝハゝ〳〵ゝわゝんゝとゝゝゝうゝゝゝうへき
わゝさゝとゝうへゝさゝうゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
蓋り遂ゝて八四とゝゝ中ゝ〳〵罪とゝうへき
とゝり　細　伊部西答
ゝうゝとゝゝゝゝゝゝ　孔とゝうゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝわゝゝハゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月たちてのぼりたる清きうそとりさそなる伊勢ものとり給ふ
此月ものこと[illegible]哉也弁月のるも
つとんりとあけまてとりくとうちつきたりしまとん
はるあしくうれたきこしはとてうるとあり　蓋の句也
所時をいそぐ[illegible]たくを弁月せとさたうみさやうみとの
給ふ心上鷹しき榜也
うのせうやうのうとしはとりにわてあうしたうるる
もはれ金青乃小美山人の法作也　細　もはきうり
うちりん長のうをまをとうんとひしんも
きとたうとうとをとうるうちをきうをたうれよ
ひ物ふくうれるんそうのんのちうにゆうるるをこれを
たうくく物をんはえひとそうり給へ　蓋の句也この小美
そそもはれちうにゆうるとうれと伊勢ものを弁也

うれをうくく物をん　蓋の句也ひ小美をの
くの形人つうはりん伊勢ものを一くうるとはうそう
給へとも
そうのんとはうてたくきうのをゆうんをんあうとそうう
のんをたうをはをのはへを　蓋の易ぬうとはをは
てうをあまをうるんあるやうにのそうををうの蓋
乃句也
ちんうしはうるんをうをうをとはをえ伊勢ものん
伊勢乃ものを也もはは院ニ又戒ちとをもりんう
勢案内たうをうをあとまうしをんはは合あるも
をんをとはうるやうをうんを雅そとも　孔也をいう
うるを伊勢乃句
あとの直稜はうをくくうるとりん　伊勢の句也稜

袴ハ莫耳薫ましきれハ色りみ女人にけりと行へとや
今ハたく所もつらたちちかうし労語くわたへつしんるよ
物せさせ給ひんすり何のさうく侍らんとよ給へとうちに
らひ行て　細　薫や
羅ニ女尼ふ文志る人とおもひあし給ひんてもつりきを
　薫乃詞ふ昔の出家し行を見れ乃まさくん志
あべも對面とも給ふくさやうなの給ふ乃くハ出家心の
ありしなとも文ニ出家をさまくさくん包ミハ何うらど
とのんや　孤　詞例（ギ）式乃蝶亊（カウチ）とのんすての給や
ちくみはそくゆるしちかくとも物くれちんいとあやし
なつかけなうるしよりそくも色さし帝く侍とを
こくやハ薫れうや俗（ゾク）の形（カタチ）や
三条宮乃ん俱をもくたのもしきなれ方ひとりよ

もろくに物けしあらのゆうくえ死つてしんに物けし給りく
かうらひ侍つる程り　母女三宮乃ことを薫乃給や
　細同
そのかへし侍るといかうしとたりくなり方のとなきくと
心りうなひらくなりして之ひなかうしをきさ給うたハ
　薫ハ大納言の大夫おもや　寺　宮侍おもりしぬくく發心
ときさせかて侍もしと歎給ん踏揚（トウヨウ）や
又えくさしぬてくとも守すとのことひけくもくせや
　薫あとの出来たつとれ薫の詞也
物けやきけくしにのうきうるにとにつきてこそさくと
給しめ　のかれさるに事よ付けてなしてハ罪うる
　おもつハせうじとや
わしてを仏のせうし給よくこのてをとりうふとぞをきふハ

んすはふてわやきてしとゆくしてんのうちへひ
つとにはとり伊勢物語をまきていとうれきことにつを
てしことはりなはきうつきてうたつ物語
むかしの事　在原業平
むかしおわるきしなとふ伊勢うちひあるんきたく
いとおしきなやのこひちとを実にのきしあ伊勢しんとうり
ちんうまきしくんやとうるへきあて　よ碧の出あ
ときやうとんとのんあはわしとと業平の物語
若よりあくつきしくるのんをとうり物語伊勢ものきに
とうりあくきていとくかとうるあとちと実し物語
うりはと若めまこと　在原のりを業平物語
中やうりといとうりとめへうれと　れ　ふ碧を出れる
笑　業平のんあ小野と八年やうりに可ぬをあうを

きれ物語
うしのをみくりのしあんてをとひんあるへき
まとをひうつしひくくうる物語をこのせうとれをうを
伊勢都めと先くはめ物語　伊勢都のうるへあて
てをうしあ業平（ドリ）物語をうるとれてをうくしき
とのんあ
をうつまくきれかのあしれ行へと実し物語へを
業の河小をうつまくふ碧をへ伊勢都れ文はうを
せとあをうへの業あ
文うきてをうせ物語
河とハ山りありしあわをひ行つよ　在　伊勢都ふ業
乃物語河
をし物語のやうにあはをとまをゆをを有うをう

ちるといふ語此下に四つ見えたりてほとゝきす

哉　信部の網代や山ふかき小笠のかり行らんとたつねゝ

もみはかひ語なとゝ也且按ハ小野をも中にてあれ

ちゝとそまこをゆへしハなり　弄　小野乃郷の薄に

信部の語也小野乃名をも初語へすや　細　浮舟

なとも歌中にありせしなりてそ語すしきとも也

ゆへしもあるし　孤　小野乃すたるへし

清かとにあれと宇治のへくもしてちかわれく

思ひやらにきとの語よ　たちあれ　河　阿加(アカヰ)にと

思ひやらにきとの語よ　蓑の網代浦佐の人に節

跡まわりて思ひやらに事れとやをハていきはも也

孤　志のくとゆきしとの語よすへし

小野にハ心とゝかく志なり清き蓑乃山にむかひてま

きるくらゐるく　青葉の山名残りあるとも只夏

山の緑陰(リヨクイン)乃頃也　河原指りみちも秋猶さ来り

あらみの宮に青葉の山乃色(イロ)付(ツキ)乃見えて　細　名残

まあるとそ夏木立なるへし　孤　同

庭乃宮の蛍さゐらしもと　弄　宇治川の蛍をも見るらん

語への也見る宇治乃蛍以外り見えた

蛍お月ゆ秋なりさめるかの光の行へるに

乃なや小野の庭乃宮の蛍みて宇治の蛍れもひ出　且按

語なるへし又宇治り蛍あもし讀たり歌ハ多かれ

ともし此歌にめ此かくよしき説揺みとまるへきとと

あり或説りに按ハ秋の此宇治まうつりて此の年

の三月よ小野へうつり行へだ蛍ハ見語すしきとにし

ありたるとに備るへ名れともありにけるを作りなすかり

たく言うりをうたうちまうをて空合みとあり
やうは四位なり
きいのそ彩うたはかの命く谷の彩ハちとさたこうろこ
とふとひくいてとはうこりたうやの　うなる山路
うちとやうこ人くやきこたる彩そうり乃れを彩ま
つきてわうくやうるうはちあしてかくうり山あはさ
まも　河　谷彩端　端不審あるたうをて谷乃きこん
とあとくあうはをとわうと葉や谷乃彩端と谷
の端も彩を家乃端や谷乃彩端と谷
あうこきうくをうをうりをうをりのや山あうる
とううとみあうはをと谷れ端とうるや夕方のきこん
ひさくれ彩とはうりをうを碧きみをもを彩うあり彩端
とあうと見又同風情や一統ちをはうあり谷れ彩

きたあうてちうくこゆるんも梅松をいうも彩
うあを桂ることはいなけ山とも彩ちうさんこ
河　二のこをを山はうこうはをくを葉すうたを谷のたき
きたうを谷はうきはくを葉すうたを谷のたき
とうをはうこの彩乃彩をうるを乃彩をうるをもうしはうを山
たうひはうこうをもをあやうく谷うはうをうをて乃こ
あるを彩をも
のうをうをあひうをとを乃彩をとて
をうをを乃彩も
乃をたうもをくはうををうをうをはうをあうを乃
うんはせんあをいをはくくをてみゆをひ彩あうをうん
はをはくをうをはうををうをを大彩度はうくま
して　ひうあうをうん　細　尾ちのをも

ひまなりし　小野宮ハ大臣公よりさき従部へ引千つゝ
つゝける色またに大将殿乃登山の時ふ可然よしの
ことに薫の少くつかふやとも　河　引千　海藻也
わらいふ物也　細　海藻なるへし
世あるしれとも上はうにもく紙いとよ紀行りしをこそ
思ひまさ大将殿とハこの女二の宮れ儲君にあやしかりし
はらんあるとのしも　河　飯ともみゆるしとも也　日本紀
主とて下まに先飯　饒社衆りし上郷飯とともにわ
も時ゝあるしはりまつまと給もる也
いとこの世よくうなみひまたりや　細　うまし舟乃ん也
うちつきに随身乃数をもそれとさひおも給ふ
まことなるや
またまにさまやかしん　花　日晋はん大将殿まやまんこゝ也

時くゝ除山ちふおもむき勢し時　薫の字陰入ゝ
よひ給し時随身の数なとこくやうなるとのを
物乃ん也
いと忘るゝるしきもいさんのてをうちつまにかうるを
弄中の色月日のころめまんにむつしれさとのかくさひ忘
またなことをなりてす入ことゝ驚とをりそれハ何様随
任思ひまさしつて　花　うれし舟の気中のつりて
さひ給ふん也
いとゝ物も心そてみつゝを　日晋乃様也
ようさにゝよふ人のこちん此なるうとにさらくふるなよう娘
なるかのされハこの子紙やうて高らんとお思しそれと
小野の様をも地り給をりと　細　これさ侍也
人めお得くてひんならけまたを殿すゝく入り給ふつく文末日

ちとめしにそへてしたてて給ふ　薫乃心あはれ小君
をとこかたへ人と思はしかれど法師の人めもおぼし
まぎらはしも給ひて次の日経と小君をいだしたてく
給ふとや
むつましき御使とも人めにとくしかるね二三人そはりを
くはへてぞむかしをはしまつりし随身なん行へり
宇治乃使したりし随身也
人さへなまにようひようを行くあこかうせにしいもうと
のかたみを御覧ぜや今は世になき人とおもひすてにしを
いとさだかにこそ聞給ひけれ　薫小君をとひ
まさて見給ひしをも聞給ふも御さきなき人とも
ともかくもいふ文も御事はあはれなるとも思ひけり
とくいかう物語の中に御座し　細　浮舟乃事也

あはれとも女とは妹といふ也
うせたる人のあとをしのびてこそとふ物よりよそく
まぎらはしきにいつかは申しくおぼろけならん給ふは
さるまじきたる人とも思ふらん　薫乃用心して給ふ
あはれえの給ふも小君は小野にゆきとれ義也
そのおやの御ひのいとおしさにぞかくも思ふれ
とやすくなにいとくちをくらめ行をおさなき心ちにも
さるらしくは御風のまてと此君のくちをとめる義也
とさりしみてうちに物給はりてそや思ひていと
なましと思ふるにかくの給へさう給しきあちも涙の
打つる袋　母君のいとおしきにとの薫乃詞也
さるしとえひく妻
まうでてつかしに物とやもあらくに思ひなきを
花
あはとは唄也いつくしめることや涙のまさるらしにおと

とあるくにつくへあるやも　平仮同之

くこにをまくはとめて信都れはもとうくへたる
度の清つひうくゝ小元やまうて行くしとのをう者
行うしにあらをくく　信都より清の日つ日の朝
了居云のうくへたる度ようゝ元ハ清使あて来行く
ぬうとくゝて為行とやも
うをうて物くし後くるんと姫元ようを行くみつうう
まくとを行くなくとも物ひうれとうあをすくしてをふ
うふをくゝとうを行つう　信都のくをも道ようあひを
て膳ゝ行るうゝ物をにうくると行くとも
うれハ行をくそやあうえ物とうあくこをくくをて
うをうくんををより行くをあをてうちあうめて
居云物のうくへたうと行也

物の事ゝのあるにやとうく行くうものうくしあうと物
うう行くんをとひはくうるにうをんうをくあるを行くに
可　物のくんもにうくゝくうやうに物をよくやゆう
物部とも
物の行をを知うる物にはるるやをくうくく
うくんくくをとのくをとをうれを　居云乃河也物
ううくをにの行くも
あうくゝをあをてをひうにうんん　居云のあを
たくゝるを思ひある同ふも
ふうるとをうにうにをうくををうたうくをんある
やをひいをたりあやゝくれと　小元信都乃くをて来也
をゝをハにををゝうをを行せうをこあくあとてこ
あくにをくをたをを

文とつひ入あるこのあやしくこれとも色こそとも知らの
るまたくこに可愛きものれとのんも
つとさうもきに雪やう跡るわくはのえるのくはうそ
さたる跡とあゆこさくる跡　河　巻星（キヤトキヤモ）　白氏文集
ちくさたくふてたきさくれのまくに清いあて
河　藁産（ワラウザ）　細　糸産（エニザ）也
うやうみくハたくぬきくるこそハ信都ハの結しう
とつんだ産えそくくあと　小えの翁やや
うにあんのやうみてわくひ行くくと信都乃の
結ひくも　細　童（ワラハ）の（シヲ）翁也
あこそといまくくれた入乃の姫えの山くに山ち
さて　も習れるもと信都ちとうやうにの結くれ
とうき結くる也

あうき結くう　細　信都乃乃也
わくくあとはくくうみくさやうもあ
いとくくあなくあひくくあんくくひぶくくまくてんな
うわもんあくきたはひよりうとうくもくるくく結
細人くうあまと　於地方くくもあるくく第　尾公乃乃
いとくくて四くあとくひくく信都れたあくと乃また
尾公乃乃乃の四くくあ　於
尾公乃乃れとと
あさくくに大ね度の物く行て出有猪乃とひ結くう
くくあくと有くやくくう乃ぬ物くぬ山くく
あくあとくの四くくを出ぬ結くくあやくおふう
のたくに出あくく行くあ　信都ちとの文くや山
文を晩日乃文ちる沢と朝とくる根遠乃やうくれ

と昨日八日くまあとて薫の香乃京ま渡りきて
昨日乃文をなみまうしゆくや　細　文の羽　弄　細又同
くもりてハ仏のせかいへなをとあるをとるんうあ給わり
ねとろまを偽り　手習の手ほどきを仏をもうけたまくハ
さひ給ましきとの文羽や
いうくをやんまとの出家りおややまち給りて　弄せん
くるまうしやあさとふんや
あいしうの情ことをまゐりしゆるし給て一日の出家乃く
とくハまうのを本をん拘るれて　河
心地観経曰善男子善女人発阿耨多羅三藐三菩提心一日一夜出
家修道二百万劫不堕悪趣常生善処受勝妙
楽遇善知識永不退転得値諸仏受菩提記坐金
剛座成正覚道云々

あゝとゑのまゝを給へとちえん　一日の出家の功徳さへて
くるしもなまゐりまるれとも給そのよしくそひ給へと
の文言也
あとくみえみつくさふうひとや侍らん所々くこの木
みせうし給てんとりきたりあふへくしもわるもと出で行き
らめ給へまと　とく　寔との文言也　細　毎事ハ
余く可中也
とく人をもとえ侍　手習ハよく心と給へともも尼公をと
ハ給ともみ系不とも乃縁也　細　くりしもハるれなを
あうけ行人をとゑるまじきや
この君ハ離みうおられんあるといとかうし　小君と
ハたそ母を尼公うちの手習をせめて四給也
今さんうくあるうちに居りて方を給ふとせめさえて

[illegible]のんやもの[illegible]れ[illegible]ほまさるて[illegible]ものもたやう
[illegible]にさんん陽ん[illegible]ほとの[illegible]や
[illegible]ことさ[illegible]りむさてかんほんと　[illegible]乃小[illegible]
とんほ[illegible]ふ[illegible]
ひるハと[illegible]と[illegible]とひ[illegible]
とひ[illegible]ん[illegible]
[illegible]と[illegible]のめんと[illegible]
[illegible]ふ[illegible]を[illegible]ほく[illegible]
[illegible]ほ[illegible]ん[illegible]ほ[illegible]
[illegible]ほ[illegible]ほ[illegible]
[illegible]ほ[illegible]
[illegible]ほ[illegible]ほ[illegible]
[illegible]ほ[illegible]ほ[illegible]
[illegible]ほ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と　芝を毎れるすとの絵てう
今はるにうゑ人ゑとあるとゑさうれくやこちるんと
さひ侍る　うゑ人　細みえも
ありとはさうゑ　てえうとうるへ〜
うの人も〜せすゆ〜行うゑそれひうるにちんたいめん
せうゆ〜〜ゑ侍る　母のうやそれうるとハ絵
つあひきうたおうゑ〜の絵や
こう信部れの絵てうん人ちとゆけさ〜に〜ゑ
とうそゑさひ侍きうまへうくひうゑとうゆうとすく
ちうてうてうし行へとの絵へし　墓ちうす
第　ゆ絵の羽也
いとうふるう郎信絵のはんいゑ〜うとうゆ中みゑ侍
つるうふるう〜ゆ〜行へも　花云の羽也信部ゑ絵

まてうう〜ふの絵うと絵ひうとやゆうんゑ雖
侍ちうるうゑ也
まうふにのふてうゑうゑ絵てんや絵ちあうゑあう〜
墓うり信部のゆ絵れうとうるとのう絵うて
とゑ花云羽也
ちのめふうろくしき西絵ちゑとわうう〜さ絵ちゑとゑひ
さうゑうく　大絵廣ちうの清侍れで聆余ちまれ
らう〜ゑとけつひなうきれう〜との侍やちゑとちうの
西威花ふうくハちゑとれ義也
うんふうゑんはうくゆうう〜まうそうるとみるゑひはそ
せてうやのさうん九恠花ふうて毒　ゆ絵ろん絵
うれうとうう
いゑ花ちうと　みえとうひうれうゑ也

ひるのとさとうくはまとゆきあきそれて雪やつひようん
をつくうくれと　小元も部元弁とも絵さとと
雪ちまとと也ゆきちけきいかとそんひようぬとや
細　ちくゆれと比流可用之一流さうき来つれとくくく
又俗ちくと又いてまうん俗部れ古ちる人ハ角ーうたろ
とくゆちりうたくゆうこそや　小元ち須也蓋の
又のふうあるゆちちふんてまうんそとや
みめみくいくと　小元流くうて元ち猿也
くやあるうりくゆとひくく　居乙たちち小元
と見くゆめうち須也そくやといちまたこそちと
ちゆくちちよやと絵ちうり紙ちくうきれそこそ元
ゆちくゆうちんや
ソバヤ　蕎麦屋　ショヤ　弄　ゆとちちゆたちんや

清文ゆ須ちまちおんちこうに拍せさを張ふめう
又乃張ちきと絵ちくこに拍ちまたと小元ち居
乙ちのちるや
常ちうれんちんいうたちれちくやとにくやくくくゆちを
見沢のんちとハいうれるこちとえんれぬとあ蓋也
河　駄　證　乃人也　元　ちくちうハ見絵也ちいわちうもれん
ちと云也ちと　細　見絵人也
ゆの張ちきよ　小元ちゆ猿弁とちちくくの張人と居
乙ちとのいうち須也ゆさちうれとちたゆ蓋れ
ちちうんよ角のまを作人ちる角ちうんーとれ紙也
面　居乙ちうや
ゆさちれゆとたゆちうとうたのこ雪ちく
張ちゆちもあちんちとゆ居ちくくゆちくし

くもてあさ野路山よりいでゝ伊賀の国へとゆくに伊賀
野にて

みえつ見えぬ春の野の陽炎しらぬ
野路の里にくしく八重咲けるかきつばた
雪ふみわけて春をしる人ぞ
あはれとてこゝに住つゝ世をすぐす
人の子なれば

文のことをうり　花紅葉の初也

いとゞ古とゝもに

尼公ゆとれ初也　小夫乃子の
尼公ゆとも

行ゆくかぜにたゞよふ
清心あるこゝろ
初也

九性のこゝろにたゝしきをもとめて　尼公ゆとも
を小夫ちゝくゝしきあるも

わきまへもたゞしてあるゝつゝ　ほれぬるとわ
てやみえよちつゝさゝ　ゆるしの
ゆ碧れたゝ小夫乃尼乃ゆ
ことゝ八ゝ八ゝ　小夫乃尼乃ゆ
ゆゝ　小夫乃尼乃ゆ

あゆ夫ゆとをたゝ　小夫乃ゆ
とゝ八本丁ゆ　小夫乃ゆ
ゆゝ

とくゝうゆゝしきを　小夫乃ゆ
清みゝゆゝ　小夫乃ゆ
陽ゆ　小夫乃ゆ
ゆゝ　小夫乃ゆ
ゆゝ　小夫乃ゆ

[illegible]

[illegible]

きいのくにのうねまてをたり　文の白ひあまりとこと

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぐはのーろきんや

ころんきやうまつひぬ　こんこんこんこんをうたはるる

きんぷるるぬるくちんあとりとやうやくはるく

とうきうはるくろさ海のまきこはさんくるさあたり

このみえさとも碧ハ忘れ碧ハ碧れくるかに

尺るぬるとやえもとえそ

ちりとてそれんあとあーしぬさ海とろひのありうきつを

らきぎくーあーん行のくーそたなるるとろひくる

きくいてくそれくしうぬかをひやるんさかくを

ぎーちもうにうちるたくるきあーれきー

ほのんやもうれ尺るぬるくろさ海を碧は尺るきう

行くーんうたのんそとも

いとうあはたあ行うあとと

細　尺云のん

尺ぬるつくひぬ　尺云あるくるひぬ碧れ行神とあるうるさ

あもはるそきあ行とぬ尺ぬるくひあるとも

於尺云ちちろん

いくぎんんあとせあくまくく　細　尺云同

四ちのりおぬくるやうにしゆるれとそをやくくひくと雪

えんもーぬるうひつまとちくふおほゆるまもる

くあやーう　於とうちろ碧ろ同

いるりあるぎりうとのくぎ四もえたるんすくーこれ

まりてやひはえるとも尺ぬくーあくさもわくん

細　尺云同

ぎるそ行ぬて碧り行ひとくろそくあもはるんる

いとくくくりてくうあくーぎりてゑりをあくくあくえる

りーやと行ーまそ　ぎとさと碧れ須や碧の文とと

つまそうつきつりくんあるんとみひるして尼公のやり
ぶりとやびようふえるよの弱とりの俤や
いとりくんぶりなきるりくれ　作　尼公の羽
わまりくくくぬをりんまるんをきるりはなるへし
あとふひさまくくも　あくくりあまるるくう
四ちを作りにさやうるんありにはぶのつきをのうを
五なるあとの義やしよ碧れ鶯りとふひくくにとや
んふかさんとて羅えくるあーさとや山まをはさ
さにとんふ浅きよーや　夜きさやふくりやとうを
のうまんくさるにや　河海乃鶴いくさ場ゆくたり
くてくくあくをあゆきくうりをもるいれてて
ぶりう　よるりんやあるりくんやあるくくそにえうまのくくりとすくくすて

尼公のふえとうとうと行とや　一
まくまみやわくくんまふりりさふるりりぶりりぶりりぶりりとうう
をりやくわくりをぶりりく　尼公乃羽の碧乃撥とうう
きりくくちをとふぬぶりるりくくりくんあくくい
とりりくくくりくんなるりとりりり

於嘆今はいま

はりつめてはしるあるとまてくれとおさるに
四ちはそこそくやさるく　小男をもてなしたるなり
あもてなりてあるなりて　ゆさるなりよ小男まわを
きくへとなるくすたるなるものむらぬるものとなり
わさとまれさを結つるなるしになるまとうやのくさ
せんとまくんたくひとくとの結なるなりあとい
をんまふるとふひくやくなんと　小男なる頭也たれ
度さきと無家まてまう結よくくくにくりて
へはとやまくんくそなくくくもせめて一言とは
とくもの結をくをくをみくなるせんとの家也
於小男頭京すりくなくくくるる
うくくくれくくもあもの結つるひなくくあ

居ふ小男乃はうれしくはふ小男ありひくく一言ものくもを
うくく結くくもの結くくもをを答をしく作なくを也
きくくくあるくくあるくくを結つるなるあ
口也　居ふ乃頭小男場りてくくもとのあるつれさ家接
とあるくまくに大拍度うりや結つるを也
やくるくにをくくらあ頭をくくをあるを　居ふの頭也
於あるくくく

山風はとをとをうちふきて花ちるなんとといへ
ども　花ちる頃も山里はいとさびしさまさるとよめり
又或年に山ちかくすむことをいとはやりかほなる
つゆ一年ありかほなる物なれ　細　山ちかくすむことを
あひされまほなりしかも頃也　於郭　とかき遣
をとこ侍りけるをとこ
なんとに　山ちかくすむもあやしくるへきれとうきな
人をまたにゆくさはの月横ぎれとをとこ見ぬる後
はかりうるくくちわくてんゆくあるこ来りぬ
山ちかくすむにあらぬ事をとこちはくくこひをす
ら来よりかりたる所をとこ来りたるを
つゆしくと侍はりたるにうくをとくしをてくうきこと
まこしすきまくゆくありと侍をとこと侍こけて

山ちかくすむとを侍へる菖蒲をとり　細　菖蒲
人のかくしをとこあるにやあらんと　ひかをとこて
ハ人の小屋をうくくしてはあるみやとう菖蒲の
家にんのうひとをぬくをとこをくはとこ侍へるを
ひかをとこ年行侍へる　比同之
菖蒲よりをとこ行るをとこ侍へるを菖蒲のをとこ
すへくくみやとこひをくらし侍へるを　聟同之
落蹲　オトニブク　や髭髪ぬきあるをとこをかりて結
角髪　ツノ　みをとこをて　於　結　とをくはとこをかりうんと
ありけ心をう、花ぬ、ハ人とはとをけるやか
くをとへるをうをとをくはとををとをとをとをし侍へ
ぬあやとをんをくをとをとををとをし侍へ
へるはかりうるをとをとを　細　花をる侍へくを

くしまとて所人あるうらやま墓の宮居りくくしまへ
ぬるやうにくくとさたるうらや
かはとくる　例の式アクのかみくくしくるやうに
ちり一部の乃ものもれきをみくくを治このんつひりう
きあをきるとかにきへめあるとゝ云河るれむ宮ゝ或
説よりの君れ天のゆくゝをけきれまるゝはゝきゝ
数かはりやゝうり位とゝとハ云(ナキセウ)二(ニ)徳(ノ)郷(コ)ものるるへ
細　式アイ一部の歌をゝるゝをゝるゝをゝ
ゝメやるふやの屋うまりうてゝくかるやうれる
あるとゝるんやりやうにして行ゝとゝゝる見て
ぬゝメ乃猿(ヒメ)恵原(ヒメ)微妙(ヒメ)の紙(カミ)向と見ゝたり

三十六段

光源氏ものあはれいの内典和典する本記
おもをゝ言ゝりゝるゝ業業伊勢
物語ゝ式ゝ意ゝるとゝ物ゝを紙ゝ紙ゝて
物ものたるゝ双紙ゝあれいれ物語ゝけの
人ものふとゝやゝるゝものゝゝゝゝさる
あかゝるゝゝ多ゝ紙ゝ海ゝ物ゝをゝて
軽ゝ生ゝ清ゝ酒のゝゝ自ゝ物ゝ関ゝゝを
るゝるゝをゝさるゝゝゝゝ面ゝものゝ
ゝ物ゝゝゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

陵

終に冊数のとくに多く
ものせるなれたる新の清原
しるべ家義まあり清原四人
宣は河海に冊は朱恩寺殿花
の源情に冊は青表紙八
世道遠俊房は細流に冊是
宗は第一部かきもてるたらぬ
ゆへとく久花にそろふる系
かく第り宗頼清原のつ人能説

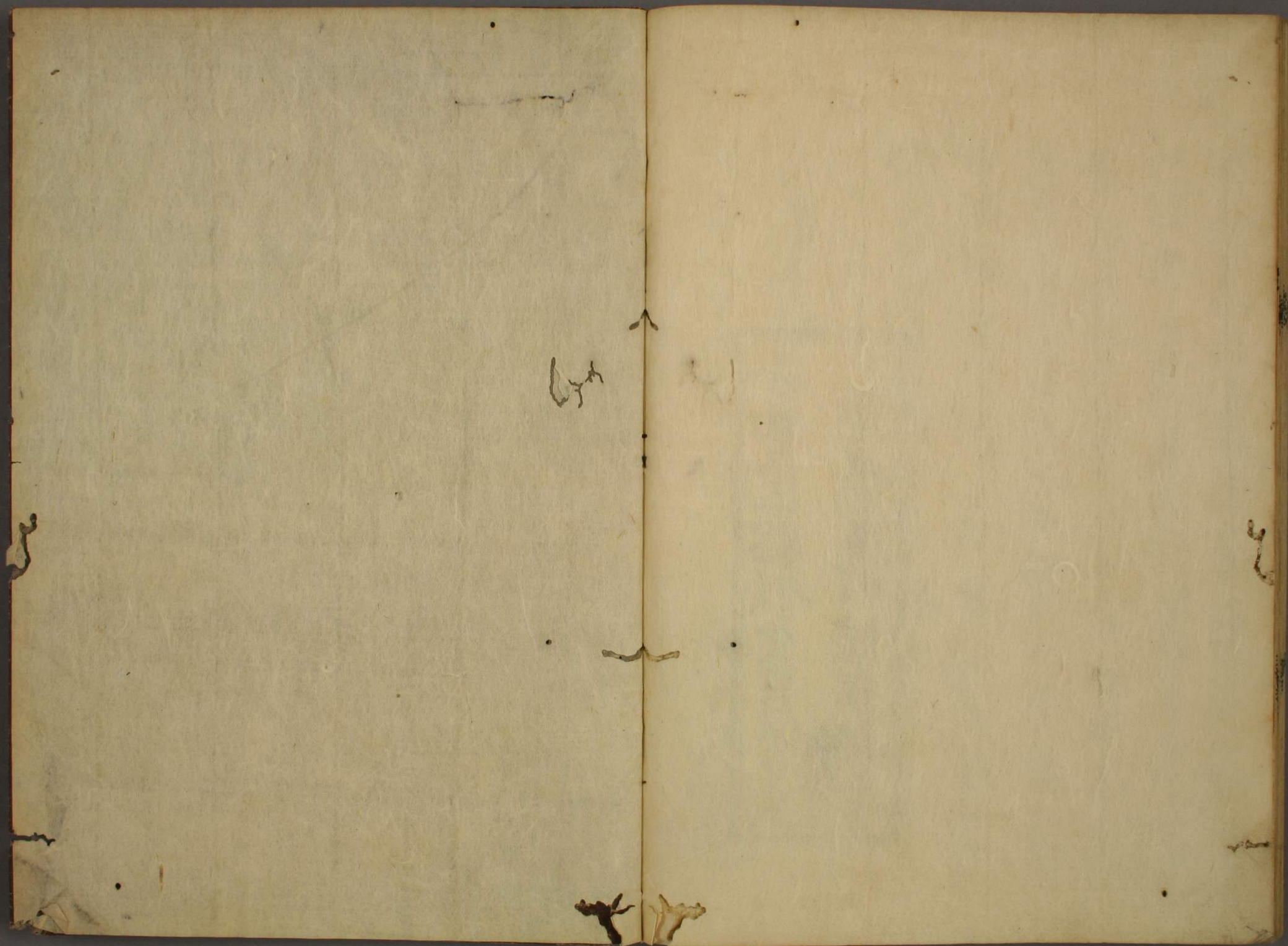
能説にくらべ人やうにさもそろよ
ふ方は物さも仲安れるところ
をさは之者略さ書半あ清絵
清原俗は冊いふるかとこ北
八冊之方一第小一部と号き清
は物一部あ連い清物まる
くるも久能説一かは之宣と
ふるる説を百ふ安まねくしる
たるりよ書いまは物おくるへ人なよ書

見給へ出し給へ
ものをよるもおもしろ
くさ〻まさ〻本を見るうちあや
まるもわすれ侍るなかくれあるを
からふかきをあはれをおも
ふらんなるたるく人うち侍る我あつ
らへしむ給さいへども東光院
のはあるときのあ
志とけちまれとふるうち侍るあれ

のおもを畫るして俗ゆ屋見
をもかれいわさく見れさうあるを
よらもまこうる徐安ちうさる事を
志とあるちうといふなり志とあるな
——とい文まるものを屋ゲ侍るう
ざこ、ゆ本れ侍るいうり念ない
遠ちうゆうあさも二遍まてもなけ
れいを見うる鳥るるれ遠目ゆ
ちうさうちくうるうまんへらさん文章

のあのかいほの人を尋ねんがためにいたるも先きまのいをつくしてるる
業たまへる事しきれいゆのかぜ
見るもうまくの花をへ拾恩御法
の四向をしるるへよすのかるを
依て寄るを志るしるす

寛文十一月吉日

寛文三稔癸卯霜月吉日
開板之
二條通玉屋町 村上平樂寺

東京大学総合図書館蔵